審 査 の 結 果 の 要 旨

氏　　名　　ﾖﾅｽ　ﾏﾘｰﾙｲｰｾﾞ

本論文は、東京下町で私有地からはみ出して街路に置かれる「鉢植え」に着目し、都市空間における公私境界のバナキュラーな在り方について、調査と分析を行っている。鉢植えから都市空間の様相の一端を解明しようとする着想は非常に独創的である。また、東京下町での緻密な調査は資料的な価値も高い。現地サーベイとインタビューなどの調査から得られた分析は、これまでの都市空間研究とは異なり、生活者と都市空間との関わりの一類型を新たに提示したといえる。

第１章では、研究手法と仮説が提示される．第２章では、調査対象である街路に置かれる鉢植えの定義とその歴史的解釈、さらには東京における鉢植えの使用状況などを整理している。第３章では、浅草・根岸・月島・谷中の街路空間における鉢植えの分布と使われ方の調査結果をまとめている。ここで示された綿密な調査を踏まえて、続く第４章においては「Hybrid Landscape」という概念の提出がなされ、第５章では全体を総括する結論が示されている。さらに、都市空間における鉢植えと、日本人の有する自然観との関係を指摘した上で、鉢植えをおくという行為が、都市生活者の自然への希求と関連づけている。今回の調査によって、調査対象のうち 91％の鉢植えが居住者の所有物もしくは、何らかの関係があることが指摘されており、さらに鉢植えのうちの 53％が、公共空間と私的空間の境界上におかれていることから、鉢植えと公私境界の関連について指摘している。

本論文で提出された「Hybrid Landscape」という新しい概念は、東京の都市景観を研究する上で、重要なものとなる可能性がある。近代化の過程において、日本の都市は西洋から多くのものを取り入れながらも、現在の東京は西洋の都

市とはかけ離れた都市景観を獲得している。その構成要素の一つとして、公私の境を曖昧にする鉢植えなどの私有物がある。

　このような公共空間へのインフォーマルな浸食は、生活者の外部空間への関与の仕方、公私の力関係、都市への態度表明などの現れと見ることも出来る。つまり、公共空間の部分的私有化に着目することは、生活者(私)と都市空間(公)との関係の在り方を解明する一つの方法といえる。この観点から、本論文によって提出された「Hybrid Landscape」という概念は、日本の都市景観の固有性のひとつを浮き彫りにし得る有効な手段として考えられる。

　綿密な調査を土台とした知見の豊富さ、さらには「Hybrid Landscape」という概念の有効性などから、本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格を認められる。